
J K(×2)が異世界へ行きました。

H L

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

JK（×2）が異世界へ行きました。

【Nコード】

N8439Y

【作者名】

H L

【あらすじ】

女子高生が突然の異世界トリップ。

普通なら取り乱して泣くところ……ですが、それが二人なら？

仲仔なJKは二人揃えば無敵です！

「異世界？余裕（笑）」

あげばよ×クールな今時Jk達が好き勝手して、それに振り回される王子様やら宰相様やらのお話し。

重要なのはつけまとかクレンジングとか日焼け止めとかがアルかナイか。

(^ ^) プロフ

【しゅりたす】

岬 朱里 (みさき しゅり)
JK?

好き

買い物
マンガ
携帯ラブ!
ダリン(〃 〃) 照り／／／
リッたん

特技

メール早打ち
妄想
寝ること

【りっちゃんむ】

赤坂 理津 (あかさか りっ)
JK?

好き

メイク

猫

黒

乙ゲー

美白

特技

歌

料理

18禁(/ \) 照り / / /

＼しゅりたす×りっちやむ／

最強仲仔 よろぴく(^ ^) /

編集／しゅりたすwww

＼しゅりたす×りっちやむ／blogより抜粋。

(^ ^) プロフ (後書き)

初投稿です。 よろしくお願いします。

始まり？（プロローグ的な？）

目開けたら、周りには怪しげなおっさんたち。みんな杖持ってて
変な格好。

と、イケメンな男が1人。

イケメンなのに変な格好。

軍服？軍服コス！？なんか黒くて悪役っぽい！

見回すと、外国の神殿みたいな建物だった。

えー？

オッサンたちが何かざわざわしてる。どうしたどうした？

「お前たちは一体…」

お前こそ一体…とか言ったら怒られそうなので、黙って見つめるにとどめた。

先程のイケメンのセリフを反芻する。

” お前たちは一体…”

” お前たちは一体…”

” お前たちは一体…”

「やばー…超いい声」

「は？」

「や、なんでも」

黒髪なびかせて、この男色気パねえ…。

うう…！

「いやーんリツたん！ヤバいんだけど！キタコレ！」

右隣のリツたんの腕をバシバシ叩いたら、超冷たい目で見られた！

「キタコレ言うな。キモい」

「ひどっ。せつかくの胸きゅんを！」

私が1人きゅんきゅんしてる間、隣のリツたんことリツさんは涼しい顔で周りを観察していた。

「何こっ」

リツたんの問いかけにイケメンは無表情に答えた。

「ヴェール国の王宮内にある神殿だ」

始まり？（来ちゃった。）

「ヴェール国だつてよ、リツたん」

首を傾げるリツたん。

「ヨーロッパ的な？」

「さあ…アラビアンのだつたらどうしょ？あそこらへん意味わかんないんだけど」

「え、あたしヨーロッパらへんもよくわからんけど」

ダメダメな二人が揃っても何もわかんない、と。

「朱里ググレ」

「おけー」

カチカチカチカチカチカチ…

あはん。 圏・外

「リッさん無理ッしたぁー」

「ちッ使えねえ」

「携帯が、だよねもちろん」

リッたんは時たまドS…

てかiモード繋がらん！やっぱ外国か！！電波悪いだけー
！？

リッたんが怖いからイケメンに話し掛けてみた。

「ねえねえ」

「なんだ」

またまたざわつくオッサンども。

始まり？（来ちゃった？）

「日本て知ってる？」

「にほん？」

「アメリカってわかる？」

「あめりか？」

はい、発音が大変可愛らしいです。

「リッたん……思いたくないけどコレってさあ」

頭の中で1つの単語が弾き出されました。

「言ってみ」

「えっとおゝ最初に”い”がついてゝ、最後に”ぷ”がつくのかな

「んだ？」

「さあ？」

リッたん即答。

「一瞬でいいから考えようよ」

「めんど…」

リッたんクール。

「正解は異世界トリップ！」

「ないわー…」

「私もそう思う」

でもさあ

チラリとイケメンと神殿を見て、もう一度リツたんを見た。

「ぽくね？」

「ぽい」

だよね。

リツたんも色々諦めて認めたみたい。

というわけで、こちら異世界に来ちゃったみたいです。

始まり？（とりあえず。）

その後。

「てかマジで？リアルに異世界？なんか信じられないんですけど」

夢オチじゃね？

だって異世界とかトリップとか王国とか、小説の中の話やーん。

「けど二人揃って学校帰りに海外とかないじゃん。なんか日本語通じてるし」

冷静なリツたんさすが！でもそれなら…

「マジ？あーあーどうせなら旅行バッグで来たかったしい。こなん（学校鞆）とかマジ萎えー」

メイク落としは？ワックスは？アイロンは？充電した いんだけど
！コンセントなんてもちろんないよね…

「お、ラッキー。あたしセブンで買ったナプキン入れ っぱ。終わ
ったけど。朱里、カラコンある？」

「無いっすー。メイクポーチとリップ入れてただけで も褒めて〜」

「おい」

学校鞆を各々漁る私たちにちょっとイラついた声をか けてきたの
はさっきのイケメン。

始まり？（とりあえず。）

「はい？」

「お前たち、さっきから何を二人だけで騒いでいる？ ……おい術者共！」

イケメンは私たちに尋ねたかと思ったら、後ろを振り返ってロブ被った怪しげなオッサンたちに厳しい声をかけた。

「お前らの仕業か？どこから喚よんだ？」

オッサンたちは「ひっ…！！」とか言ってビクついて青ざめている。

「こいつら二人とも、明らかに我が大陸の者ではないだろう。しかも突然現れたのを俺もすっかり見ていたが？」

後ろ姿で見えないけど、言葉1つ1つが刺々しい。イケメンがお怒りだ。

しかしまあ低い美声がまたいい感じに耳にくる。

オッサンたちの中でも一番年とってそうな、長い白いヒゲのオッサンがプルプルしながら一歩前に進み出た。

名前わかんないから命名「勇気あるオッサン」。

「お、恐れながら…」

「何の儀式をしていた？」

怒りを含んだイケメンの声に、勇気あるオッサンはこっちをチラリと見て、「お耳を…」と、イケメンに何やらゴニョゴニョ内緒話をした。

するとイケメンはピクリと反応し、真面目な顔して勇気あるオッサンと共にこっちを見てきた。

「余計なことを…」

「申し訳ありません。しかし私共もまさかこのような…」

「ではこの二人が？」

「いえ、どちらかかと」

意味深な会話が始まった。

「イケメンが見つめてくるよりッたん。何コレ脈あり？」

「見つめてねえし。明らかにじろじろ観察されてんだろ」

「でも心がときめく…」

「…ばか？」

リッ
たん
冷た
い
…
!!
!

始まり？（とりあえず。）

まあぶっちゃけて言えば。

うちら二人は花嫁候補として喚よばれたらしい。

うんありがちありがち。

誰のって、もちろんあのイケメンの。

そしてイケメンは王子様だった。

うんうん、王道王道。

けどさっきの姿からするとどっちかって言つと魔王だ。

魔お…じゃないイケメン王子様の名前は…

「俺はリディアス・レイ＝ヴェール」

「んん？り、りで…」

「リディアスね」

ちよ、リッたん何で言えるの！

「…りです」

「リディアス、だ」

イケメ…じゃなくてリディアスが訂正を入れてくる。 発音すると
ムズいんだよ！

「りでいあす」

「惜しい」

とリツたん。

「何か違う」

とリディアス。

「りでいあす？」

言えた？

首を傾げたら目の前にいたリディアスはニヤリと笑って、

ニヤリと笑って……

ちゅ。

ペロッ。

「仕方ないな、”リド”でいい、……シュリ？」

耳にキスして

あげく舐めて

囁きやがった。

は？私？

ええ、もちろん惚れましたけど。

だって胸がきゅんきゅんしたああー！！！！

なにこのチャラ男……！！！！

閑話

変な女：たちが現れた。

*

ヴェール王国は大陸の中でも1・2を争う大国。この数百年安定した繁栄を誇り、城下の都も活気に満ちている。

そんなヴェール王国には現国王の元に2人の王子たちがいる。

第1王子 サイル。

御年28歳。

第2王子 リディアス。

御年26歳。

最近のヴェール王国家臣達の関心は、2年前隣国の王女と結婚した
サイル王子から、未だにのらりくらりと婚約者どころか恋人も決め
ない第2王子リディアスにシフトチェンジしている。

そんな今日この頃。

*

変な女たちが現れた。

何をとち狂ったか、家臣達は国家が誇る最高位魔術師たちを総動員

して異世界から女を召喚したらしい。

しかも何故か2人。

…嫁候補？

…正直まだ遊んでいたんだけど。

*

リディアスは異世界から来た2人を観察した。

向かって右の女はフワフワした髪を腰まで伸ばし、茶色とも栗色と

も言えない不思議な色をしている。

「ねえねえ」などと軽々しく声を掛けられた時は驚いた。

隣の女はリディアスと同じ黒髪を…なんと肩より上で切り揃えていた。

普通女性は髪を胸元辺りまでは伸ばす。

2人は知り合いらしく、親しい口調で会話している。

似たような服装をしており、下着ではないのかというようなスカート……ト……

（これはスカートと言えるのか？）

……もどきからは、白い足が惜しげもなく晒されている。

そして、2人とも目がでかい。睫毛に至っては恐ろしく長い。人形のようなのだ。

唇は見たことも無いほど光っており、ぷるぷるしている。

会話を聞く限り、なんだか頭の足りなさそうなフワフワ髪と、無表情で冷たそうな黒髪。

この2人のどちらかと結婚…。

無理だな。

そう思った。

名前を教えたらフワフワ髪が困った顔をして言った。

「りでいあす？」

ずっけゅん。

前言撤回。

フフフフ髪でしゅぽ。

閑話（後書き）

第1王子サイル「リドは昔猫飼ってたよね」

家臣「ええ、可愛がっておられました」

第1王子サイル「確か茶色の…」

家臣「いえ栗色では」

第1王子サイル「そうだったかな？ちよっとお馬鹿な子猫だったよね（笑）」

そらから？（むしろここから？）

あの後、チャラ男…もといリディアスはフェロモンを大量放出させて口説いてきた。

もうすでにフォーリンラブな私はバッチコーイ＼（＾o＾）／で口説かれました！

リツさんの超冷たい視線はとりま無視！

さっきまでは魔王だったけど、今は夜の帝王なりディアス。

リディアスの後ろにいるオッサンたちからは彼の長いマントで隠れてて見えないけど

抱き締めながらさり気にも太ももさわわしてますこの人！

これでブツサイクなオヤジだったら痴漢だけど…

「やん！えっちいー」

「ああ、すまない。柔らかくてつい手が」

「えゝリドなら許しちゃうーみたいなー」

美形なら許せる。

だって私乙女！たぶんしょく　んまんに遭遇したドキ　ちゃん並みに目がハートと思う！

「どこまで許してもらえるのか確かめようかな？」

「きゃッ
」

ドグシッ！！！！

「……………痛いですリツさん」

「目エ覚めた？」

「バツチリ。」

DSの角でぶん殴られました。
怒ったリツたんマジ怖い。

「こんなトコでイチャつくなバカップル」

「えー」

「うざいキモい。うざキモい。」

「二重苦！ごめんなさいー！！」

リツさんにキモがられるなんて嫌！

ため息をついたリツさんは、チラッとリディアスを見て言った。

「超遊んでそうじゃん、こいつ」

「だよねー思ってた」

ウンウンと頷いたら、気のせいかリディアスのエロスマイル（命名）がビキッとひくついた。

オッサンたちも何やらハラハラしてるみたい。

「なんかホストっぽいし。百戦錬磨ってゆーかさあ」

リツさんはリディアスを上から下まで観察してる。

見つめられてるからってリツさんに惚れんなよ！リツたんクールビ
ューティーでマジ美人だけど！

てかホストって。

「わかるー！No.1とか飛び越して、殿堂入りしてそう！んでガンガン客に貢がせてそう」

「あーそんな感じそんな感じ」

そらから？（むしろここから？）

「…………よく分からん言葉が多いが、なんとなくお前たちの俺に対する印象は分かった…」

美形のため息！なんかアンニユイで萌える！

「うちのどつちかを花嫁にするんだっけ？そのために喚んだんだよね」

リツたんが私の腕をグイッと引つ張って、後ろから抱きしめてきた。

いやんシュリどつきどきー！

なーんて考えてる内にもリツたんとリディアスの会話は進んでいく。

「シュリでいいのね？」

「シュリ」が「いい」

「花嫁とか言ってるけど、愛人とか…」側室”だっけ？そーゆーや

「つならボコツて潰すよ」

りりりリッたん！潰すって……ガクブル。

「本当にお前は恐ろしいな。愛人や側室じゃない。正式な妻として迎える。シュリー人だ」

公開プロポーズキター（・・）！！！！

ただし何故かリッたんの腕の中だけど！

リッたん刑事の取り調べは終わらない。

「過去の女関係は？」

「……後腐れのない別れをしているから問題はない。ちょうど身辺整理が終わった所だ」

「ついでに聞くけど、シュリがあんたの嫁になったとして、うちの扱いはどうなの？」

「シュリは妻として、もちろん私と共に城に住んでもらう。お前……リツと言ったか？……は、妻の友人であり貴賓として、同じく城に部屋を用意するつもりだ。もとよりこちら都合で無理に異世界から来てもらった身、望むなら郊外に屋敷や領地を与えよう」

「ふーん………ならまあヨシ」

何がヨシ？とか尋ねる間もなく、私はリツさんにドーンと押されて、前にいたリディアスの胸に文字通り飛び込んだ。

「んぶッ！ー！！」

「シュリ、私が許す。そいつの嫁になって幸せになれ」

「へ？いきなり何？」

今度はリディアスの腕の中で首を傾げると、リツさんはこちらに来て初めての笑顔でキュピーンとサムズアップして言った。

「シュリ、あんたがそいつの嫁になれば万事解決。衣食住に困んな

いしシュリは念願のダーリン get。私は結婚なんてまだ無理だからヨカッタワ」

「えっと、リツたん？」

五分前まで「信用ならねえ」て顔でリディアス見てたよね？

「シュリ、お幸せに」

私、リツたんに売られた系？

包み込む暖かい腕に力が入った。

「幸せにする、シュリ」

「…よろしくお願いシマス！」

うん。ときめいた！

デイスティニー！！！！！！！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8439y/>

JK(×2)が異世界へ行きました。

2011年11月27日12時48分発行